

# 障害者の障害意識に関する研究 —生きがいと障害受容の関係性に着目して—

山末 祐美 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)  
指導教員 河西 正博

キーワード：先天性障害者，障害受容，生きがい

## 1. 緒言

岩井 (2009) は、障害受容を「病気や怪我などで精神や身体の機能の一部を失った者が、その事実を受け入れること」と述べている。また、Wright (1960) は障害受容の価値転換プロセスとして「ショック」「否認」「混乱 (怒り・うらみと悲嘆・抑鬱)」「解決への努力」「受容」があると述べており、「喪失の受容」を何か違う価値に置き換えるという考え方を提唱している。例えば、「歩くこと」にこだわらなければ、移動は「車椅子」によって可能である。

これらの障害受容に関わる先行研究の多くは中途障害者を対象にしており、先天性障害者に関する内容はほとんどみられない。また、障害受容モデルが先天性障害者にすべて当てはまるのかについては検討の余地がある。そこで、本研究は、先天性障害者を対象としたインタビュー調査から先天性障害者の障害受容過程と生きがいの関係性を明らかにする。

## 2. 研究方法

先天性障害 (骨形成不全症) をもつ O さん (女性/65 才) に半構造化インタビューを行った。

### 【主な質問項目】

- ・小学校から大学までの生活について
- ・就職について (職種, 職場環境)
- ・生きがいについて
- ・健常者への期待について
- ・自身の障害について

## 3. 結果と考察

先天性障害者は、障害があることが「当たり前」の状態であり、自分自身の障害を認識するタイミングは、本人の生活環境や周囲の人々との関わりによって変化するものと考えられる。中途障害者はもともと「健常者」と呼ばれる立場にいた人であり、ある日突然の事故や病気等、様々な要因によってある時「障害者」となる。中途障害者は一般的に、不自由なく生活できていた障害受傷前の自分と、以前のように自由に生活できなくなった障害受傷後の自分を比較することになるのではないかと考えられる。

本研究の対象である O さんの場合は、生まれつき歩くことができなかったため、「歩けない＝障害」ではなかった。しかし、小学校に入り、周りはみんな「歩ける」、「一人でトイレに行ける」、「体育ができる」というように、自分との様々な「違い」を認識させられる中で初めて自分自身の障害を意識し始めたといえる。また、O さん自身が学校在学時にできなかった運動・スポーツとの出会いは、自分自身を「～できる」存在であると認識させてくれるものであり、様々なスポーツ活動に参加していく中で、自分自身の障害認識が変わってきたものと考えられる。

現在、O さんは移動場面等で不自由さを感じる部分はあるが、自分自身の障害を受け入れ、講演活動やスポーツ活動を積極的に行っている。また、O さんにとっての生きがいは、様々な活動を通して障害というものを受け入れ、「～できる」自分を日々感じながら、自分自身の障害をさらけ出せるようになっていった要因の一つと言えるのではないだろうか。

## 4. おわりに

先天性障害者はもともと障害を強く意識しているわけではなく、周囲の人々 (健常者) と関わっていく中で、徐々に意識し始めるものと考えられる。また、先天性障害者にとっての生きがいは、本人の障害受容に肯定的な影響を与えるものであるといえよう。

本研究は、一事例を元に考察しているため、研究テーマである先天性障害者の障害受容過程について一般化することは困難であった。この点が課題として挙げられる。

## 引用・参考文献

- 岩井阿礼 (2009) 中途障害者の「障害受容」をめぐる諸問題—当事者の視点から—。淑徳大学総合福祉学部研究紀要。43 : 97-110。  
Wright, B. A. (1960) Physical Disability: A Psychological Approach. Harper & Row.